

小児の摂食・嚥下とその発達・病態

村本 和世

明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 生理学分野 教授

日常の食事の際に我々は、特に何も意識せずに食物を噛み砕き（咀嚼し）、飲み込んで（嚥下して）いる。これらは習慣的に行われることから単純な運動であると考えがちであるが、咀嚼や嚥下は実に精緻な制御機構によって営まれている人体でも屈指の複雑な運動でもある。さらに、食に関わる運動能力の獲得は決して生得的なものではなく、誕生から小児期を経て食の適切かつ段階的な経験を積むことによる後天的な学習によって完成するものである。特に咀嚼運動は、乳児から小児期での食経験による影響が極めて大きい。嚥下は主として反射運動によって成立しており、胎児期から既にその萌芽が見られるものの、それでも成人の嚥下と小児期のそれとは様相を異にしており、成人型嚥下への移行にはやはり小児期の適切な食環境が重要である。摂食機能の獲得は運動の主体となる神経や筋、顎骨などの正常な発育と平衡しており、健全な摂食機能の成立のためには食に関わる身体器官の健全な発育が伴わなければならない。一方で、機能の獲得と器質的な発達は相互に影響し合っており、適切な“食べ方”の獲得無しには、例えば顎骨の発達不全や歯の萌出異常など、“最近の子ども達特有の”発達上の変化の一因ともなり得ることも報告されている。

近年、小児の食に関して、例えば「噛まないで丸呑みしてしまう子が多い」など、各方面から多様な問題点が指摘されている。小児の適切な摂食機能・運動の獲得には、器質的な障害以外にも、社会生活における“しつけ”や発達のステージに応じて適切な食を与え指導するなどさまざまな要因も関わっており、多因子的な影響も考えなければならない。

これらの小児特有な問題点を考えるために、本講演ではまず摂食・嚥下の基本的な過程とメカニズムについて成人の摂食・嚥下過程を基に概説する。安全な食の支援・指導を行う上で、摂食・嚥下の基本的な機構について理解しておくことは重要であろう。次いで、摂食・嚥下を獲得する段階を、乳幼児～小児期での発達ステージを追いながら、成人と異なる点や各ステージでの機能獲得に重要な点などに触れていく。最後に、小児期にみられる摂食・嚥下障害の種類や病態・原因について簡単に触れたい。

摂食・嚥下機能は、単に栄養素を摂取するための身体機能ではない。口腔の運動は、脳の広範な領域を活性化し、幼児期から小児期における正常な脳機能（知的機能）の発達にも重要な影響を及ぼすことが解ってきている。また、よく“噛む”ことは満足感を与え、食べ過ぎを防ぎ、将来的には肥満や糖尿病といった生活習慣病の予防に繋がる証拠も得られてきている。健全な摂食・嚥下機能の発達は、単に食べるだけでなく、子ども達の健全な発育にとっても重要であるとの視点を理解いただき、自立的な栄養摂取が困難な子ども達が、口腔の機能を獲得しQOLを高められるよう少しでも本公演が参考になれば幸いである。